

## 学部専門科目「環境英語 3, 4」に対する学習の意欲：

## 「環境英語 1, 2」履修生向けアンケートの分析

Learning Motivation for “Environmental English 3 and 4”:

An Analysis of Questionnaire for Students Enrolled in “Environmental English 1 and 2”

太田絵里\*, 櫻井千佳子\*\*, 吉村スーザン\*\*, 岡野恵\*\*\*

Eri OTA\*, Chikako SAKURAI\*\*, Susan YOSHIMURA\*\*, Megumi OKANO\*\*\*

\*東京工業大学グローバル人材育成推進支援室, \*\*武蔵野大学環境学部,

\*\*\*大正大学表現学部

[要約] 本研究では、環境英語関連科目群を履修している学生向けに、専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識、英語の学習方法の現状、当該科目に対する関心および期待、当該科目の活用方法等に関して、継続的に実施したアンケートを比較し、学生の意欲や学習状況、希望がどのように変化するかを把握した。比較分析の結果、環境分野の学習のツールとしての英語の重要性に対しては以前よりも意識が向上しており、科目履修の効果として、情報収集よりも意見交換、情報発信というより積極的なコミュニケーションに対する期待が環境英語に関連した学習を継続するにあたり強いことが分かった。また、世界の公用語である英語力の必要性に関しては環境英語入門の履修時から継続して高い認識があるが、学生の英語力を含む学習の向上のための努力は依然として講義に関連したものに限定されていた。

[キーワード] 環境英語、英語力、環境問題、情報発信、コミュニケーション

## 1. はじめに

現在我が国では、少子高齢化、資源不足、国際競争力の低下等の多くの国内の課題に対応するため、国境を越えて活躍できる人材、すなわちグローバル人材の育成が急務であるとされている。グローバル人材の育成はまた、国内の課題のみならず、環境問題、資源問題、エネルギー問題、食糧問題等地球規模で起きている課題の対応にも貢献する。これらの社会的ニーズを反映し、近年日本政府はグローバル人材育成推進事業等、高等教育機関を対象とした人材育成に関連した政策を強化している。内閣官房長官を議長として組織されているグローバル人材育成推進会議によれば、グローバル人材には、「語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」を含む要素が必要とされると示さ

れている。加えて、今後国内外で活躍する人材に共通して求められる資質として、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」が挙げられている<sup>1)</sup>。これらの政策実行において具体化されている人材像からは、主体性や積極性、コーディネーション能力等の様々な素養と共に、異文化および自国への理解、専門性と幅広い素養、語学力が求められていることが理解できる。

これらの社会的ニーズに対応すべく、武蔵野大学環境学部では平成 22 年度より専門科目として環境英語科目を設置している。武蔵野大学における環境英語科目は、平成 22 年度に設置された「環境英語入門 1, 2」(1 年生対象必修科目)、「環境英語 1, 2」(2 年生対象選択必修科目)、平成 23 年度に設置された「環境英語 3, 4」(3, 4 年生対象選択必修科目)の

3 つの通年科目で構成される。環境学という専門領域の教育プログラムを修得する過程で必要な語学力を修得しつつ当該分野の知見を深めることを目的とし、段階的なカリキュラムで構成される継続的な科目群である。

環境英語科目群は、英語教育、環境学、環境教育を専門とする教員らがその内容や教育手法を検討している。科目設置から4年が経過し、履修生の学習状況や学習への意欲等に関して、これまで試験結果、提出された課題内容、アンケート結果等を通じ把握してきた。“学部専門科目「環境英語」に対する期待と課題”（太田他, 2013）からは、以下の6点が明らかになっている；1)履修希望者はグローバルな環境問題に関心が高いこと、2)世界的な課題である環境問題を理解する上での英語の必要性に高い認識があること、3)専門科目の理解に耐えうる英語力を達成する努力が必要であるが語学強化のため取組を行っていないこと、4)英語力の向上よりも英語を使って専門知識を増やし、情報を収集し、それらを活用したいという希望があること、5)当該科目は専門科目の履修の一環が履修目的の主なもので、その後さらなる活用としての大学院進学、留学等に対する希望者も存在すること、6)「環境英語」という科目の活用方法として、情報収集、英語力の向上、自らの意見の発信を求めていること、である<sup>ii)</sup>。

## 2. 研究目的及び方法

今回の研究では、環境英語入門を履修しその後継続して環境英語1,2を履修した学生に対して実施したアンケート結果を比較した。具体的に、環境英語入門の履修生に向けて平成25年1月に実施したアンケート結果とその後環境英語1,2を履修した学生に対し環境英語3,4の履修について平成26年1月に実施したアンケート結果を比較した。比較結果を基に、専門科目の教育プログラムが科目ごとの達成目標に応じて段階的に発展する過程にお

1. おおよその英語レベルを教えてください。
2. 現在興味のある環境問題は何ですか。
3. 環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか。
4. 現在英語をどのように勉強していますか。
5. 「環境英語 1,2」履修にあたり、困難に直面したことはありましたか。その際、どのようにその問題を克服しましたか。
6. 「環境英語 1,2」を履修して関連専門科目である「環境英語 3,4」に興味をもちましたか。
7. 「環境英語 3,4」という科目に興味を持った理由は何ですか。
8. 「環境英語 3,4」という科目に期待する学習効果は何ですか。
9. 「環境英語 3,4」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか。
10. 将来、環境問題を英語で理解し、コミュニケーションを図れるようになった場合、将来それをどのように活用したいと思いますか。

表1：アンケート質問内容

いて、学生の意欲や学習状況、希望がどのように変化するのかを把握した。このことにより、今後本科目の教育プログラムの目標設定、教育手法等に関する課題が明らかになり、英語による専門科目の教育プログラム構築の参考になることが期待される。

本稿では、現在開講されている専門科目である環境英語1・2及び環境英語3・4の科目の目的について述べた上で(3)、アンケート結果を比較分析する(4)。その後、比較分析結果をもとに「環境英語3・4」の教育内容や教育手法のあり方を考察する(5)。

環境英語1,2を履修した学生に対するアンケートは、次の通り実施された。配布対象は、選択必修科目である「環境英語1,2」を履修し、今後選択必修科目である「環境英語3,4」の履修を検討している学部2年生の学生35名である。アンケートでは、学生の英語レベルに関する設問として、語学能力検定試験の結果及び環境問題の興味対象を把握した。その後、環境問題を理解する上での英語の必要性、英語の学習方法、「環境英語3,4」という科目に期待する効果および活用方法に関しての設問を設定した(表1)。質問4,7,8,9は複数回答とした。アンケートの回答時間は15

分とした。その後、今回行ったアンケート結果を集計し、平成 25 年 1 月に実施した環境英語入門の履修生 59 名に向けたアンケート結果の当該グラフに今回のデータを追加し、比較を行った。

### 3. 環境英語科目の概要

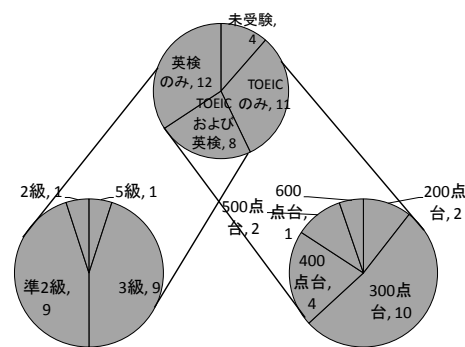
「環境英語 1, 2」の目的は、教科シラバスに「地球規模で起こっている環境問題を英語で理解することは、環境に関連した情報源の拡充につながり、問題の複雑さ、相互関連性を学ぶ上で重要である。本科目では、自然科学のメカニズム、人間と自然との関わり、現在起こっている環境問題、持続可能な社会構築に向けた取り組みを、教科書を中心に学ぶ。」と示されている<sup>iii</sup>。

同様に、「環境英語 3, 4」の目的は、「グローバルな課題である環境問題を英語で理解することは、環境分野での専門性を向上するために重要である。本講義では、熱帯雨林の保全、捕鯨問題、人口問題、貧困問題、地球温暖化問題、エネルギー問題等のテーマを扱う。本講義では、教科テキストの内容を理解した上で、関連テーマに関して新聞、雑誌、インターネット、DVD、専門書等の様々なメディアによりテーマの理解を深める。その後、関連テーマについての意見について議論することで、意見の共有や新たな知見の発見につなげる。」と記されている<sup>iv</sup>。また、前期に開講されている環境英語 3 では英文レポートの書き方について学び、後期に開講されている環境英語 4 では英語による口頭発表の方法について学ぶ。

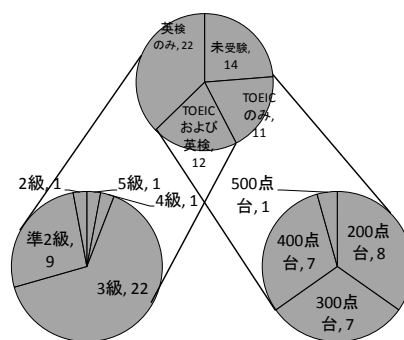
## 4. アンケート結果

### 4-1. 英語レベル

履修検討者の英語レベルに関するアンケート結果は、次の通りである。語学能力検定試験未受験者が 4 名、英検および TOEIC の双方の受験者が 8 名、TOEIC のみの受験者が 11 名、



環境英語 1, 2 履修生



環境英語入門履修生

図 1: 履修検討者の英語レベル

英検のみの受験者が 12 名である。その内訳は、次の通りである。英検 5 級が 1 名、英検 3 級、英検準 2 級が各 9 名、英検 2 級が 1 名、TOEIC スコア 200 点台が 2 名、300 点台が 10 名、400 点台が 4 名、500 点台が 2 名、600 点台が 1 名である。この結果から一部例外はあるものの、平成 25 年度に環境英語入門を履修した学生の内、比較的英語レベルの高い学生が環境英語 1, 2 を履修した傾向にあることがわかる (図 1)。

### 4-2. 環境問題の関心

履修検討者の関心の高い環境問題は、食糧問題 (9 名)、生物多様性 (9 名)、フェアトレード (3 名)、森林問題 (6 名)、エネルギー問題 (4 名)、海洋汚染 (2 名) であった。その他のテーマとしては、地球温暖化、水資源問題、途上国問題、環境教育等が挙げられた。

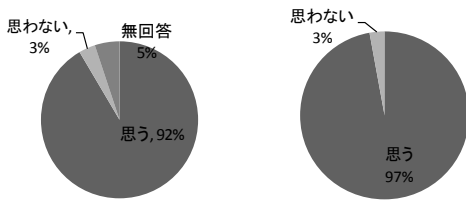


図 2: 質問「環境問題を学ぶ上で英語は必要だと思いますか」に対する回答

### 4-3. 環境問題学習のための英語の必要性に関する認識

環境問題学習のための英語の必要性に関しては 9 割以上が認識しており、環境英語入門履修時よりも高い意識がある(図 2)。その理由として 6 割以上である 23 名が「環境問題はグローバルな問題であるから」「環境問題は地球規模の問題であるので公用語である英語が必要」といった環境問題の国際化またそれに伴う英語の必要性を挙げた。次に「日本以外の問題を理解するため」、「貴重なデータや資料が英語で書かれていることが多い」「視野を広げたい」等、広範囲の情報収集を希望する学生が 10 名と約 3 割を占めた。必要ないという回答では、「文献などはある程度日本語または和訳で対応できる」という意見が挙げられた。

### 4-4. 英語の学習方法

英語の学習方法に関しては、9 割弱が講義の履修と回答しており、講義の履修および予習復習は約 3 割が行っていた。英会話学校や英語教材の利用等、講義以外の学習を行っている学生は 1 割以下であった(図 3)。この結果から、環境英語 1,2 の履修者と環境英語入

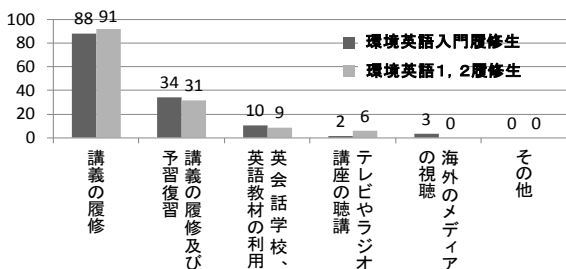


図 3: 質問「現在英語をどのように勉強していますか」に対する回答 (%)

門履修生には学習方法に関して大差がないことが分かった。

### 4-5. 講義の課題に関する克服方法

「環境英語 1,2」を履修し、困難に直面したか、また、その際の克服の方法は、という問いに対しては、7 名が単語を調べるために辞書を多く使ったと述べている。また、5 名が友人や教員に質問したと述べている。回答者の約半数である 18 名は無回答、または特になし、とのことであった。

### 4-6. 専門科目である「環境英語」への関心

「環境英語 3,4」の履修に関しては、9 割以上が興味を示しており、環境英語入門履修時よりも関心が高くなっていった(図 4)。興味を持たない理由として、「英語の習得のみが目的」、「難しい」と述べている。「環境英語 3,4」という科目に興味を持った理由として「英語のさらなる上達」、「環境問題を理解する上で英語のスキルがあったほうがよい」という意識が環境英語入門履修生よりも高いことが特徴的である(図 5)。

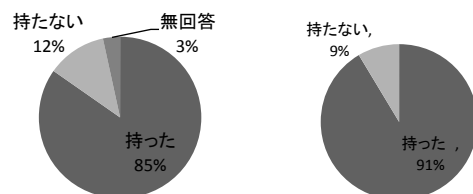


図 4: 質問「「環境英語 1,2」を履修して関連専門科目である「環境英語 3,4」に興味をもちましたか」に対する回答

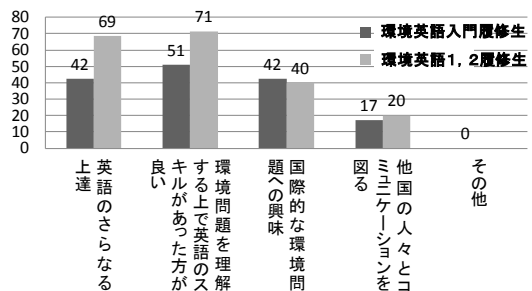


図 5: 質問「「環境英語 3,4」という科目に興味を持った理由は何ですか」に対する回答 (%)

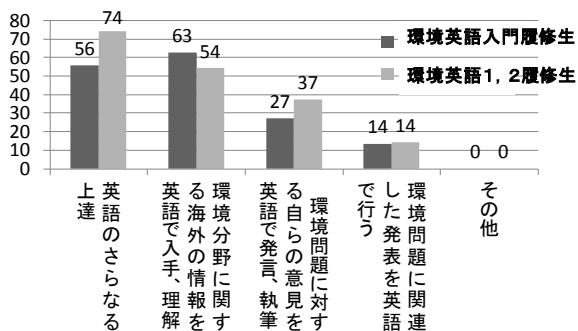


図 6: 質問「環境英語」という科目に期待する学習効果は何ですか」に対する回答 (%)

#### 4-7. 「環境英語 3, 4」という科目に期待する効果

当該科目に期待する効果として、環境英語 1, 2 の履修生は、環境英語入門の履修生と比較して、「英語のさらなる上達」という希望が英語による情報入手よりも高い。また、環境英語 1, 2 の履修生は、環境英語入門の履修生よりも「自らの意見を英語発信、執筆する」という英語の能動的な活用に対する希望が高い。その一方で、英語による情報収集に対する希望は、環境英語入門履修生の方が高い(図 6)。

#### 4-8. 学部における「環境英語」という科目の活用方法

学部における「環境英語」という科目の活用方法に関しては、「専門科目の履修の一環」と回答した学生が全体の約 7 割を占め、「就職活動の際のアピール」が約 2 割、続いて「大学院進学」が 2 割弱および「留学準備」がそれぞれ 1 割弱であった(図 7)。このことから環境英語 1, 2 の履修生および環境英語入門履

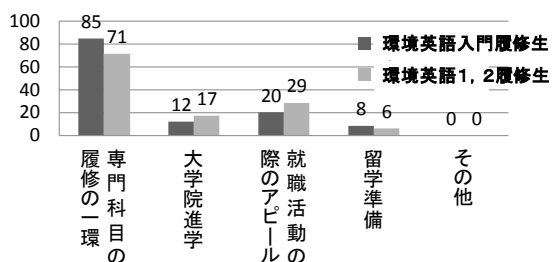


図 7: 質問「環境英語」という科目の履修は大学在学中にどのような利点があると考えますか」に対する回答

修生共に当該科目の履修目的は専門科目の履修の一環という意識が大部分を占めていることが分かる。一方で、「大学院進学」、「就職の際のアピール」は環境英語 1, 2 の履修生の方が高い(図 7)。

#### 4-9. 効果習得後の活用方法

環境問題を英語で理解し、活用するようになるという当該科目の目的が達成された際には、「環境問題解決のアイデアをいろいろな人たちから聞きたい」、「世界の人々と話したい」といった他国の人々との意見交換を求めている学生が 22 名存在した。次に、「環境問題についての知見を広める」、「コラムや記事を執筆した啓発活動」といった情報の発信をめざす学生が 3 名存在した。その他の希望として、「海外企業への就職」、「海外留学をしてボランティア活動を行う」、「環境ビジネスの創設」等が挙げられた。

#### 4-10. まとめ

アンケート結果の比較から専門科目の履修における英語力の必要性に対する認識、英語の学習方法の現状、当該科目に対する関心および期待、本科目の活用方法について、次のようにまとめる。

第一に、環境英語 1, 2 の履修生は、環境英語入門の履修生の中でも比較的英語レベルの高い学生が学習を継続している。

第二に、環境英語 3, 4 の履修検討者の興味の対象は、食糧問題、生物多様性、フェアトレード、森林問題、エネルギー問題、海洋汚染等環境英語入門の履修生と同様にグローバルな環境問題に関心が高いことがわかる。

第三に、世界的な課題である環境問題を理解する上で英語が必要であるという点については環境英語入門履修時から引き続いて高い認識がある。

第四に、英語の学習は環境英語 1, 2 の履修においても依然として講義に関連したものに

限定されている。

第五に、「環境英語 3, 4」という科目の履修においては、英語力の向上そのものに対する高い希望があり、英語を活用した情報収集等の目的を上回っている。

第六に、環境英語 1, 2 の履修生および環境英語入門履修生共に当該科目の履修目的は専門科目の履修の一環という意識が高い。一方で、大学院進学、就職の際のアピールといった科目履修以外の目的は環境英語 1, 2 の履修生の方が高い。

第七に、「環境英語 3, 4」という科目の活用方法として、意見交換、情報発信等を希望している。

以上のことから、環境分野の学習のツールとしての英語の重要性に対しては環境英語入門履修時よりも意識が向上しており、科目履修の効果として、情報収集よりも意見交換、情報発信というより積極的なコミュニケーションに対する期待が本科目の学習を継続するにあたり強いことが分かった。なお、世界の公用語である英語を活用し問題を理解した上で専門知識を活用するという希望、またそのための英語力の必要性に関しては環境英語入門の履修時から継続して高い認識があるが、学生の英語力また学習の向上のための努力は依然として講義に関連したものに限定されている。

## 5. 考察

英語を使い専門分野の知見を深めることを目的とする「環境英語」であるが、今回の比較分析結果から、履修生たちは、英語を修得した上で環境学の理解に必要な情報収集、情報発信、意見交換等を行うという希望が高い。このため、ツールとしての英語を活用することの重要性に対して高い認識を持っていることが理解できる。環境英語 1, 2 は英語力の強化を希望する場合と環境問題の理解の深化を目的とする場合とそれぞれ、ベーシックとア

ドバンストの2つのクラスレベルに分かれていることから、履修生の目的達成のための適切な教育プログラムが提供されていると言える。また、「3. 環境英語科目の概要」で述べた通り、環境英語 3, 4 はそれぞれレポートの執筆方法、発表方法の教授も学習内容に含まれており、授業では通年ディスカッションが組み込まれていることから、履修希望者の目的に対応する形でカリキュラムが適切に構成されている。また、環境英語 3, 4 では熱帯雨林の保全、エネルギー問題等グローバルな環境問題も扱っており、本点においても履修希望者の興味対象と一致している。

しかしながら、科目の構成及び目標設定は適切であっても履修生の英語レベルと学習方法からは当該科目の目的を達成するための努力が不十分であることが明らかである。一方で、平成 25 年度よりも TOEIC スコアが上昇しているのは、教養教育課程の英語の必修科目として開講されている TOEIC クラスによる影響があるとも考えられ、学部全体として実施している英語教育が相乗効果として本科目の履修生の英語力にも表れていると考察される。

語学の向上には継続的な学習が不可欠であることから、今後は、本課題に対して、授業をきっかけとして学生自身の英語学習や講義テーマに関する学習意欲が高まり、講義以外で学びが広がる努力を行うような仕掛けづくりや動機づけが必要であると考えられる。

<sup>i</sup> グローバル人材育成推進会議 (2012)  
www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf. 8pp. (2012年1月12日閲覧)

<sup>ii</sup> 太田絵里, 櫻井千佳子, 吉村スーザン, 岡野恵 (2013) “学部専門科目「環境英語」に対する期待と課題：履修検討学生向けアンケートの分析(論文)”, 日本環境教育学会第7回関東支部年報, 日本環境教育学会, 13-18.

<sup>iii</sup> 学校法人武蔵野大学 (2013年1月23日閲覧)

<sup>iv</sup> 学校法人武蔵野大学 (2013年1月23日閲覧)